

2011年度 研究報告大会報告論文(要旨)集

環境経営学会第11回定期総会

環境経営学会研究報告大会実行委員会
特定非営利活動法人 環境経営学会
(Sustainable Management Forum of Japan)



巻 頭 言



環境経営学会 名誉会長
西 澤 潤 一

西暦 2000 年を記念して建設され動き始めていた地球シミュレーターが漸くある程度の結論めいた相関を示し始めたようである。先日伺った話では、現在漸くその存在を否定しきれなくなった温暖化現象の 60%は CO₂によって誘発されているということだそうだ。

私はほっとしている。このままいけばさらに CO₂が増して、将来人類はおろかあらゆる動物が体内から CO₂を排出し、O₂を取り入れて体内で燃焼する呼吸作用が機能しなくなって死に至る CO₂量である 4%を超えることも決して遠くないことであるかもしれないのにほっとするのは何事かということになるだろうが、私にしてみれば仕事の責任上発表して御協力を得なければならぬという一念から申し上げた「二百年で 4%」という見通しが定性的にはほぼ誤っていなかったという気持ちが、きちんと私が考えている防止法を実践していただければ回避できるという考えの上で申し上げているからの事である。要するに早く対策を開始していただくことが基本だということに変わりはない。

もちろん、原子力が代替の強力な候補であるのは言うまでもないが、未だ使ってしまうにはもったいない。私の考えているのに水力がある。ダム建設も当然のことながら嫌悪対象であるが、農業用との兼用の考えを捨てれば、単なる階段化のための土木工事だけになって大量の水を蓄積することは必要でなくなるか

ら、ダム建設に伴う自然への圧迫は大幅に少なくなる。
只見川系統のように一段下げるたびに発電を繰り返して流れ下っていくようにすれば、電力が余剰を生じたときには下から頂上の沼沢沼に水を汲み上げてエネルギーを蓄蔵することで電気エネルギーの最も不得手とする貯蔵まで一体化できている世界に誇る施設となっている。

概算によれば陸地に降る雨の0.1%を水力発電に利用できれば、現在の必要エネルギーのすべてを賄うことができる勘定になる。

従って原子力発電を緊急用として資源を温存しつつ消費していくのが正しい態度となる。

決して原発は安いからという夢を追って原料を浪費するような態度をとるべきではない。

一部に見られたようにこのような人達の一部に共通したことは、一つの行為に溺れて他の面から見ることを怠るようになることであって、このような行為は正に致命的であることは原発の東日本大震災の教訓と思うべきで間一髪誤れば正に取り返しがつかないことになる所であった。

討論会などでよく聴かれた言葉は“想定外”という言葉であるが、確かに想定しておくべき要素もたくさんにあり、きりが無いと言ってしまいたくなるが、その一つ一つの持つ意味は他分野とは比較にならぬ程重い。

他分野では“細かい”などと一言で決めてしまうことが、この分野では種族はもちろん、甚だしき場合に至っては全生物の命脈を制することになるような甚大な被害を受けるに至る例に乏しくない。

生物も生活している唯一と言うのは言い過ぎとしても稀少な宇宙空間として其処に指導的役割を果たすべく命運を享けた我々としては、ベストを尽くしてこれに報えるべき努力を尽くすべきであろう。

他の科学分野ではもっと慎重にテストしてみて安全を見極めてから本採用にする。

今度の原発事故で見られたように、「しまった！」と止めようとしたら止まらなかったというようなことは始めからやるべきではなかった。何か新しく事をやろうとしたときになかなかできないのが人間の仕事だった。

凄いがやれるようになって来たのが最近の人間で、簡単に物事ができるようになって、始まってしまおうと止めるのが大変、というよう

なことができるようになった。

この時、人間たるもの“これは少々勝手に違ふぞ”と取り扱い方に慎重になるべきだったのだ。

それをそう考えなかった時に人間の文化の放棄が始まったのだ。まず人は「持続」を考えよう、同時に「終結」を考えなければならない。すべてはその後にある。これが科学者としての第一歩である。科学の特徴は“やり直しがきかない”ことだとも言える。

科学のベテランとなった筈の人間が“やり直し”をすること自体遅いのだ。

報告論文要旨集（下記参照 全 180 ページ領布価格 2,000 円）を購入希望の方は学会事務局（smf@smf.gr.jp）までお申し込みください。